

No. 22

# 研究所だより

発行

2008年9月1日

 明治学院大学  
 社会学部附属研究所

〒108-8636

東京都港区白金台1-2-37

TEL (03)5421-5204~5

所長 野 沢 慎 司

## ネットワーク形成の拠点！

所長 野 沢 慎 司



『研究所だより』の第一号と二号は、手書き原稿をそ

のまま印刷した素朴なスタイルで一九八四年に発行されている。現在の形で再発行されたのは一九八九年の第三号からである。それからちょうど二〇年の歳月を経たこととなる。しかし、研究所自体の歴史はそれよりもはるかに古く、前身の「明治学院大学児童相談所」が創設された一九五六年にまで遡る。それが一九六二年に「家庭福祉研究所」と改称して研究部門の活動を付加し、一九六五年の社会学部創設と同時に「社会学部附属研究所」となった。児童相談所時代を含めれば、半世紀以上にわたる研究・実践活動の実績を誇る。

今年度は認証評価の準備年にあたってのこともあり、研究所の業績を改めて振り返る意味で、過去の『研究所だより』をじっくり読み返してみた。そして先達の歩んできた道、現在の研究所の置か

れている位置に思いを馳せた。そしてひとつ気づいたことは、一九九六年三月発行の第九号（移転特集号）以降、それまでの「附属研究所」という名称表記が「附属研究所」へと変化していることだ。これは単なる偶然かもしれない。しかし、わずかにではあるが名称と居所を改めた研究所はこのときやはり生まれ変わったと言うべきではないか。移転特集号やそれ以降の各号の記事からは、新築された本館地下に移転してから現在に至る十二年間、とりわけ世紀の転換以降、本研究所の新しい歴史が築かれてきたことが読み取れる。

新しい歴史の第一は、相談・研究部門の実践活動が、個別の相談活動から、港区など行政とも連携しつつ、（地域）社会の様々な団体・グループなどへの支援や個人と団体あるいは団体と団体をつなぐネットワーク形成支援へと軸足を移してきたことである。その第二は、一九八〇年代後半以降、個別プロジェクトの林立状態になっ

ていた調査・研究部門が、両学科および学外の多くの研究者が大テームの下で緩やかに連帯したネットワークを形成し、今世紀に入って二つの「特別推進プロジェクト」を実施してきたことである。そして第三には、一九九九年に「学内学生会部門」が設置され、学生・卒業生・教員の間に研究・教育を中心とした交流の架け橋を構築してきた。これら三部門は、絶えず内部が同質化し、異質な外部から断絶しがちな集団（個人）間の橋渡しを促進するという点では、期せずして同じ方向を目指してきた。

この困難な目標は、この十年間にかんがりの程度達成された。あえて言えば、残された課題は部門間の連携を強めることにあるのかもしれない。外に開かれつつある各部門の活動の内実は、研究所あるいは学部内部のさらなる協働ネットワーク形成によって新展開する可能性がある。

それ以外にも、荒波の高まる環境の下で本研究所の社会的存在意義を高める方策はいくつもあらずだ。諸先輩や関係者の皆様から、忌憚のないご意見・ご教示をいただければ幸いである。

## 研究所各部門から

### ■ 調査・研究部門

本学に就任して三年目となった。これまでの二年間は、調査・研究部門の研究員として研究所の仕事を手伝わせていただってきた。しかしながら、「調査・研究部門」のこれまでの研究の蓄積と成果の公表について無知なままに過ぎてきてしまった。このたび主任を務めさせていただくにあたり、不明を恥じつつこれまでの成果について振り返り、今後の方向を考えてみたい。

調査・研究部門の主要な活動は、研究プロジェクトの実施である。一般プロジェクトは二〇〇一年度から二〇〇六年度までに五十三件実施され、研究成果は研究所が行っている『研究所年報』に四十四本、他の専門誌に九本の論文として公表された。二〇〇七年度については八件が実施され、そのうち五件については『研究所年報』または他の専門誌への掲載が予定されている。二〇〇八年度については十一件が実施されている。特別推進プロジェクトは三年計画で立ち上げられたプロジェクトであり、二〇〇〇年から現在まで

に「現代社会における技術と人間」「沖繩―伝統的価値のゆるぎと社会問題の現在」という二つのプロジェクトが実施された。前者については、『テクノソサエティの現在Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』という三巻本（文化書房博文社）として研究成果が公表されている。

このように研究プロジェクトについてみると、社会学部の多くの教員が、積極的に研究プロジェクトに取り組み、多彩な成果を挙げたといえ、その点は評価に値する。しかしながら、その成果をどれほど多くの人びとが、しかも研究者以外の人びとが、認知しているであろうか。またそれらの研究成果が人びとの生活に対して何かしらかの貢献をなし得てきたであろうか。研究者の個人的な興味関心のみ沿ってなされてきてはいなかったか。これらの点について、繰り返し真摯な反省を積み重ねることが必要だ。そのような反省に立って、今後の研究プロジェクトの運営のあり方を検討してゆきたいと考えている。

（調査・研究部門主任

浅川 達人）

### ■ 相談・研究部門

本年度に予定されている幾つかの特徴的な取り組みを紹介したい。二〇〇七年度から継続して取り組んでいるものに本学近隣に居住する子育て中のお母さん方を支援するプログラムがある。現在、子育て相互支援活動への支援やその活動を促進するネットワークの構築に向けた取り組みの現況が近隣地域に浸透しつつあると実感できるまでになってきている。例えば、隣接区の子育て支援関係者のネットワーク会議で活動紹介の依頼を受けたら、近接区の子育て当事者対象の講座で子育て当事者によるボランティアな活動に関する講義の依頼を受けたりする機会が増えている。

二年度目に入る港区立子ども家庭支援センターとの協働事業であるが、「港区地域こぞって子育て懇談会」（以下、懇談会）を一月に共催した。子育てグループのネットワークが立ちあげた懇談会プロジェクトメンバーが、企画立案においても主体的に参加するまでにあり、懇談会当日は、側面的なサポートだけで良い状態になっていた。二〇〇八年度は、前年度同様にネットワークのプロジェクトメンバーに学生ボランティアを含め

た懇談会の企画会議が始まっている。

三年度目に入る「子育て相互支援活動のための活動スキルアップ講座」もスタートした。今年度は、活動を新たに始めてみたいと考えておられる方々も対象にする講座を開催することにした。これまで、既存の子育てグループとの出合いを求め、グループ間のネットワーク構築の支援に努めてきたが、今後は、これから子育て相互支援活動に関わりたく願う人を探し、その人材を育てる活動の展開を模索する予定である。

本年度も開催する伝統行事となっている社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会は、総合テーマを「ソーシャルワーク実践とアセスメント」とし、「エビデンス・ベイスド・プラクティスとの関連から考える」基調講演を踏まえ四分科会に分かれて学びを深めることを予定している。

（相談・研究部門主任

北川 清一）



### 学内学会部門

明治学院大学社会学・社会福祉学会（略称：学内学会）は、一九五四年の「明治学院大学社会学会」の創設以来いろいろな活動をしてきています。組織的には大学紛争時期の中断を経て一九七九年に「社会学部友の会」、そして一九九一年に現在の「明治学院大学社会学・社会福祉学会」に至っています。学内学会は一九九九年から当研究所の一部門として位置づけられました。この会は教職員、卒業生、在学生の三者から構成されて来ており、現在は、卒業生部会、学生部会、教職員からなっています。去る六月二十八日（土）に今年度の総会・特別講演会・懇親会が本館一〇階大会議場で開催されました。本学教授の松井 清先生から「対立から和解へ―北アイルランド紛争の一〇年―」と題する特別講演がありました。

松井先生が北アイルランドにこだわって研究されていることは私も知っていましたが、そのきっかけを語ったのは初めてだと思います。人生の中での出会いを大切に、それを研究に結びつける先生の誠実な態度に皆さん感銘を受けたと思います。松井先生のゼミ卒業生がたくさん来て下さいました。懇

親会では、多分野にわたる多くの卒業生から明治学院大学への熱き思いを聞くことができました。

たしかに学内学会は、卒業生、在校生、教職員の交流・研究の場として重要な役割を果たしてきました。しかし、今回の総会も参加者五〇名という少しきびしい人数でした。一九二八年の社会科創設から八〇年の歴史を持つ我が社会学部の卒業生と在校生、教職員を更に緊密に結びつけることが必要です。学内学会のあり方を検討する必要があります。

まずは、十一月八日（土）の学内学会主催の研究発表会において在校生、卒業生の発表エントリリーが増えるような手立てを考える必要があるのではないだろうか。

学内学会部門主任  
河合 克義

### 新任あいさし

私は来年の三月に定年を迎える一年だけの研究員です。十数年前社会学部付属研究所の主任として公開講座「長寿社会をいかに生きるか」を担当しました。その頃は、まだ年をとることは寿と信じられていました。しかし、今や、長生きは寿でない社会が現実となったようです。私も研究員を終わると、

その社会へ仲間入りすることになります。（橋本 茂）

久しぶりに研究所所に復帰いたしました。相談部が、港区の子育て支援のプロジェクトに乗り出した当初、どのぐらい具体的な活動に結びついていくのか、少々不安を抱いていたことを思い出します。社会福祉協議会とのつながりも出来つつあり、子育て当事者の方たちの主体的活動も活発化している現状に触れると、ほっとしている感じです。今後この活動が、より福祉ニーズの高い人たちのつながりへと発展していければと思っています。（大瀧 敦子）

皆様こんにちは。二〇〇八年度から学内学会企画担当となりました。これまで付属研究所には、ほとんど関わりを持つ機会がない状況で社会学部におりました。今回、学内学会の企画担当となったことを契機に、研究所や学内学会がこれまで以上に学生・院生・卒業生の交流の場となり、それぞれにとって意味ある場となるように努力していきたいと思えます。学内学会の企画は学生・院生・卒業生の委員から出していただくアイデアが大事です。よろしくお願い致します。（岡本多喜子）

久しぶりの学内学会の委員が「編集担当」というのはなつかしさを憶えます。再建されたSocietyの第一号をみんなで編集したのを思い出したからです。しかし最近の学内学会については会長を中心に見直しの段階に来ているのではないかと思います。古参の先生たちが徐々に退職しつつある現在、あらためて旧来のイメージにとらわれない新しいスタイルを追究してもいいのではないかと思います。（松島 淨）

#### 二〇〇八年度社会学部付属 研究所スタッフの紹介

所長	野沢 慎司
調査・研究部門主任	浅川 達人
相談・研究部門主任	北川 清一
学内学会部門主任	河合 克義
所員	橋本 茂
〃	橋本 敏雄
〃	大瀧 敦子
〃	杉山 佳子
〃	岡本多喜子
〃	松島 淨
〃	吉原 功
研究調査員（調査・研究部門）	中西 泰子
インシヤルワーカー相談研究部門	濱田智恵美
副手	平野 幸子
教学補佐	平野 美佳
事務担当	安田 彩子
学内学会部門事務担当	佐々木敬子

市民講座報告

二〇〇七年度も市民講座として、「港区地域こぞって子育て懇談会」(以下、懇談会)を港区立子ども家庭支援センターと共催しました。昨年度の懇談会で設立表明した「みなと子育てネットWa・Wa・Wa(子育てグループ等のネットワーク)」によるプロジェクトチームと当所スタッフ、当所が募った学生ボランティア(めいがくキッ

ズ&ママ・パパ応援隊)も参画し企画立案しました。開催地は港区内の芝浦港南地区。本地区は、子育て家庭急増地域であり、この地区の子育て当事者のニーズを把握しようとする未就学児の保護者への調査も行った上で、懇談会の企画を進めました。調査結果から、二〇〇七年度懇談会テーマを「急募!子育てにやさしい店と街」とし、そのための提案を行い、当日参加者と共に提案についてディスカッ

ションしました。二〇〇八年度も、引き続き本テーマを追求する予定で、みなと子育てネットWa・Wa・Waと共に企画を開始しています。(二〇〇八年度港区地域こぞって子育て懇談会 二〇〇九年一月二十四日(土)開催予定)また、二〇〇八年度も「子育て相互支援活動のための活動スキルアップ講座」を開催します。今年も、これから活動してみたい人も対象にしています。

(相談・研究部門副手 平野幸子)

二〇〇八年度

社会学部付属研究所

プロジェクトの紹介

★一般プロジェクト

☆わが国における児童養護活動を指導・育成した松島正儀に関する研究 (代表 遠藤 興一)

☆日本宗教の異文化布教に関する社会学的研究 (代表 渡辺 雅子)

☆沖縄を中心とする労働力移動 (代表 水谷 史男)

☆ヨーロッパ統合のなかの国民国家、都市、地域社会 (代表 岩永 真治)

☆「リプロダクティブ・ライツ」の再検討 (代表 柘植あづみ)

☆文学者たちは(沖縄)をいかに表現してきたか(代表 松島 浄)

☆知的障害のある人の生活と社会福祉サービスの役割・機能に関する研究 (代表 中野 敏子)

☆更生保護の支援構造の研究 (代表 八木原律子)

☆葛飾区における高齢者の生活実態と地域福祉活動のあり方に関する調査研究 (代表 河合 克義)

☆ステップファミリーにおける家族形成プロセスの研究 (代表 野沢 慎司)

☆社会福祉実践におけるスピリチュアルケアの基礎的研究 (代表 深谷 美枝)

特別推進プロジェクト「現代社会における技術と人間」成果出版! 『テクノソサエティの現在(全三巻)』 文化書房博文社

柘植あづみ・加藤秀一編 『遺伝子技術の社会学』 宮田加久子・野沢慎司編

『オンライン化する日常生活』 西阪仰・高木智世・川島理恵著 『女性医療の会話分析』

第22回社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会

「ソーシャルワーク実践とアセスメント～実践の科学化をめざして～」

日時: 2008年11月15日(土) 10:00~17:00

- ① 基調講演 10:00~12:00
- ② ワークショップ 13:00~17:00

会場: 明治学院大学白金キャンパス

基調講演: 「ソーシャルワーク実践とアセスメントーエビデンス・ベースド・プラクティスとの関連から考えるー」  
講師 佐藤 豊道 (東洋大学教授)

ワークショップ: 「ソーシャルワーク実践におけるアセスメントの意義と方法を考える」

- A: 子どもと家族の領域での支援に取り組む方々のために  
事例提供者 塩田 規子 (房総双葉学園)  
コーディネーター 北川 清一 (本学教授)
- B: 高齢者領域での支援に取り組む方々のために  
事例提供者 青木 明子 (養護老人ホーム敬愛の園)  
コーディネーター 杉山 佳子 (本学教授)
- C: 障害者領域での支援に取り組む方々のために  
事例提供者 小林 克己 (神奈川県立中井やまゆり園)  
相沢 美樹 (グループホーム・ケアホーム ウイズ)  
コーディネーター 久保 美紀 (本学教授)
- D: 医療機関での実習指導者の方々のために  
ファシリテーター 村崎 美和 (北里大学北里研究所病院)  
コーディネーター 大瀧 敦子 (本学教授)

連絡先

明治学院大学社会学部付属研究所  
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37  
Eメール issw@soc.meijigakuin.ac.jp  
TEL 03-5421-5204・5205 FAX 03-5421-5205